

CHAPTER 30

授業はすべて中止され、試験は延期された。何人かの生徒たちが、それから二日のうちに急いで両親にホグワーツから連れ去られた一双子のパチル姉妹は、ダンブルドアが亡くなった次の日の朝食の前にいなくなったし、ザカリヤス スミスは、気位の高そうな父親に護衛されて城から連れ出された。

一方シエーマス フィネガンは、母親と一緒に帰ることを真っ向から拒否した。

二人は玄関ホールで怒鳴り合ったが、結局、母親が折れて、シエーマスは葬儀が終わるまで学校に残ることになった。

ダンブルドアに最後のお別れを告げようと、魔法使いや魔女たちがホグズミード村に押し寄せたため、母親がホグズミードに宿を取るのに苦労したと、シエーマスはハリーとロンに話した。

葬儀の前日の午後遅く、家一軒ほどもある大きなパステル ブルーの馬車が、十二頭の巨大なパロミノの天馬に牽かれて空から舞い降り、禁じられた森の端に着陸して、それを初めて目にした低学年の生徒たちが、ちょっとした興奮状態になった。小麦色の肌に黒髪の、巨大な女性が馬車から降り立ち、待ち受けていたハグリッドの腕の中に飛び込んだのを、ハリーは窓から見た。

一方、魔法大臣率いる魔法省の役人たちは、城の中に泊った。

ハリーは、その誰とも顔を合わせないように細心の注意を払っていた。

遅かれ早かれ、ダンブルドアが最後にホグワーツから外出したときの話をしると、また言われるに違いないからだ。

ハリー、ロン、ハーマイオニー、そしてジニーは、ずっと一緒に過ごした。

四人の気持ちとは裏腹の、好い天気だった。ダンブルドアが生きていたなら、ジニーの試験も終わり、宿題の重荷からも解放されたこの学期末の時間をどんなに違う気持ちで過ごせたことか……。

ハリーにはどうしても言わなければならないこと、そうするのが正しいとわかっていることがあったが、容易には切り出せず、先延ば

Chapter 30

The White Tomb

All lessons were suspended, all examinations postponed. Some students were hurried away from Hogwarts by their parents over the next couple of days — the Patil twins were gone before breakfast on the morning following Dumbledore's death, and Zacharias Smith was escorted from the castle by his haughty-looking father. Seamus Finnigan, on the other hand, refused point-blank to accompany his mother home; they had a shouting match in the entrance hall that was resolved when she agreed that he could remain behind for the funeral. She had difficulty in finding a bed in Hogsmeade, Seamus told Harry and Ron, for wizards and witches were pouring into the village, preparing to pay their last respects to Dumbledore.

Some excitement was caused among the younger students, who had never seen it before, when a powder-blue carriage the size of a house, pulled by a dozen giant winged palominos, came soaring out of the sky in the late afternoon before the funeral and landed on the edge of the forest. Harry watched from a window as a gigantic and handsome olive-skinned, black-haired woman descended the carriage steps and threw herself into the waiting Hagrid's arms. Meanwhile a delegation of Ministry officials, including the Minister of Magic himself, was being accommodated within the castle. Harry was diligently avoiding contact with any of them; he was sure that, sooner or later, he would be asked again to

しにしていた。
自分にとっていちばんの心の安らぎになっているものを失うのは、あまりにも辛かったからだ。
四人は一日に二度、病棟に見舞いにいった。
ネビルは退院したが、ビルはまだマダム ポンフリーの手当てを受けていた。
傷痕は相変わらずひどかった。
実のところ、はっきりとマッド アイ ムーディに似た顔になっていたが、幸い両眼と両脚はついていた。
しかし、人格は前と変わりないようだった。
一つだけ変わったと思われるのは、ステーキのレアを好むようになったことだ。
「……それで、このいとがわたしと結婚するのは、と一てもラッキーなことですね」
フラーは、ビルの枕を直しながらいれそうに言った。
「なぜなら、イギリス人、お肉を焼きすぎます。私、いくつもそう言ってきましたね」
「ビルが間違いなくあの女と結婚するんだってこと、受け入れるしかないみたいね」
その夜、四人でグリフィンボールの談話室の窓際に座り、開け放した窓から夕暮れの校庭を見下ろしながら、ジニーがため息をついた。
「そんなに悪い人じゃないよ」ハリーが言った。
「ブスだけどね」ジニーが眉を吊り上げたので、ハリーが慌ててつけ加えると、ジニーはしかたなしにクスクス笑った。
「そうね、ママが我慢できるなら、わたしもできると思うわ」
「ほかに誰か知ってる人が死んだかい？」
「夕刊予言者新聞」に目を通していたハーマイオニーに、ロンが聞いた。
ハーマイオニーは、無理に力んだようなロンの声の調子にたじろいだ。
「いいえ」新聞を畳みながら、ハーマイオニーが咎めるように言った。
「スネイプを追っているけど、まだ何の手がかりも……」
「そりゃ、ないだろう」この話題が出るたびに、ハリーは腹を立てていた。
「ヴォルデモートを見つけるまでは、スネイ

account for Dumbledore's last excursion from Hogwarts.

Harry, Ron, Hermione, and Ginny were spending all of their time together. The beautiful weather seemed to mock them; Harry could imagine how it would have been if Dumbledore had not died, and they had had this time together at the very end of the year, Ginny's examinations finished, the pressure of homework lifted ... and hour by hour, he put off saying the thing that he knew he must say, doing what he knew was right to do, because it was too hard to forgo his best source of comfort.

They visited the hospital wing twice a day: Neville had been discharged, but Bill remained under Madam Pomfrey's care. His scars were as bad as ever — in truth, he now bore a distinct resemblance to Mad-Eye Moody, though thankfully with both eyes and legs — but in personality he seemed just the same as ever. All that appeared to have changed was that he now had a great liking for very rare steaks.

“... so eet ees lucky 'e is marrying me,” said Fleur happily, plumping up Bill's pillows, “because ze British overcook their meat, I 'ave always said this.”

“I suppose I'm just going to have to accept that he really is going to marry her,” sighed Ginny later that evening, as she, Harry, Ron, and Hermione sat beside the open window of the Gryffindor common room, looking out over the twilit grounds.

“She's not that bad,” said Harry. “Ugly, though,” he added hastily, as Ginny raised her

プも見つからないさ。それに魔法省の連中はへいまで一度だって見つけたためしがないじゃないか……」

「もう寝るわ」ジニーが欠伸びながら言った。

「わたし、あまりよく寝てないの……あれ以来……少し眠らなくちゃ」

ジニーはハリーにキスして(ロンはあてつけがましくそっぽを向いた)、あとの二人におやすみと手を振り、女子寮に帰っていった。

寮のドアが閉まったとたん、ハーマイオニーが、いかにもハーマイオニーらしい表情で、ハリーのほうに身を乗り出した。

「ハリー、私、発見したことがあるの。今朝、図書室で……」

「R A B?」ハリーが椅子に座り直した。

これまでのハリーなら、興奮したり好奇心に駆られたり、謎の奥底が知りたくて、もどかしい思いをしたものだったが、もはやそのようには感じられなくなっていた。

まず本物の分霊箱に関する真実を知るのが任務だ、ということだけはわかっていた。

それができたとき初めて、目の前に伸びる曲折した暗い道を、少しは先に進むことができるだろう。

ハリーが、ダンブルドアと一緒に歩き出した道程だ。

その旅をひとりで続けなければならないのだということを、ハリーはいま、思い知っていた。

あと四個もの分霊箱が、どこかにある。

その一つひとつを探し出して消滅させなければ、ヴォルデモート自身を殺す可能性さえない。

ハリーは、分霊箱の名前を列挙することで、それを手の届くところに持ってくるができるかのように、何度も復唱していた。

ロケット……カップ……蛇……グリフィンドールカレイブクロー縁の品ーロケット…
…カップ……蛇……グリフィンドールカレイブクロー縁の品ー。

このマントラのような呪文は、ハリーが眠り込むときに、頭の中で脈打ちはじめるらし

eyebrows, and she let out a reluctant giggle.

“Well, I suppose if Mum can stand it, I can.”

“Anyone else we know died?” Ron asked Hermione, who was perusing the *Evening Prophet*.

Hermione winced at the forced toughness in his voice. “No,” she said reprovingly, folding up the newspaper. “They’re still looking for Snape but no sign …”

“Of course there isn’t,” said Harry, who became angry every time this subject cropped up. “They won’t find Snape till they find Voldemort, and seeing as they’ve never managed to do that in all this time …”

“I’m going to go to bed,” yawned Ginny. “I haven’t been sleeping that well since … well … I could do with some sleep.”

She kissed Harry (Ron looked away pointedly), waved at the other two, and departed for the girls’ dormitories. The moment the door had closed behind her, Hermione leaned forward toward Harry with a most Hermione-ish look on her face.

“Harry, I found something out this morning, in the library.”

“R.A.B.?” said Harry, sitting up straight.

He did not feel the way he had so often felt before, excited, curious, burning to get to the bottom of a mystery; he simply knew that the task of discovering the truth about the real Horcrux had to be completed before he could move a little farther along the dark and winding path stretching ahead of him, the path

い。

カップやロケットや謎の品々がびっしりと夢に現れ、しかもどうしても近づけない。ダンブルドアが縄梯子を出して助けようとするが、ハリーが梯子を登りはじめたとたん梯子は何匹もの蛇に変わってしまう……。ダンブルドアが亡くなった次の朝、ハリーは、ロケットの中のメモをハーマイオニーに見せていた。

ハーマイオニーも、そのときは、これまで読んだ本に川てきた、あまり有名でない魔法使いの中に、その頭文字に当てはまる人物を思いつかなかった。

しかしそれ以来、ハーマイオニーは、何も宿題がない生徒にしてはやや必要以上に足しげく、図書室に通っていたのだ。

「違うの」ハーマイオニーは悲しそうに答えた。

「努力してるのよ、ハリー。でも、何にも見つからない……同じ頭文字で、そこそこ名前の知られている魔法使いは二人いるわーロザリンド アンチゴーネ バングズ……ルパート 『斧振り男』(アクスバンガー) ブルックス タントン……でも、この二人はまったく当てはまらないみたい。あのメモから考えると、分霊箱を盗んだ人物は、ヴォルデモートを知っていたらしいけど、バングズも『斧振り男』も、ヴォルデモートとはまったく関係がないの……そうじゃなくて、実は、あのね……スネイプのことなの」

ハーマイオニーは、その名前を口にすることさえ過敏になっているようだった。

「あいつがどうしたって？」ハリーはまた椅子に沈み込んで、重苦しく開いた。

「ええ、ただね、『半純血のプリンス』について、ある意味では私が正しかったの」

ハーマイオニーは遠慮がちに言った。

「ハーマイオニー、蒸し返す必要があるのかい？ 僕がいま、どんな思いをしているかわかってるのか？」

「ううんー違うわーハリー、そういう意味じゃないの！」

あたりを見回して、誰にも聞かれていないかどうかを確かめながら、ハーマイオニーが慌てて言った。

that he and Dumbledore had set out upon together, and which he now knew he would have to journey alone. There might still be as many as four Horcruxes out there somewhere, and each would need to be found and eliminated before there was even a possibility that Voldemort could be killed. He kept reciting their names to himself, as though by listing them he could bring them within reach: *the locket ... the cup ... the snake ... something of Gryffindor's or Ravenclaw's ... the locket ... the cup ... the snake ... something of Gryffindor's or Ravenclaw's ...*

This mantra seemed to pulse through Harry's mind as he fell asleep at night, and his dreams were thick with cups, lockets, and mysterious objects that he could not quite reach, though Dumbledore helpfully offered Harry a rope ladder that turned to snakes the moment he began to climb. ...

He had shown Hermione the note inside the locket the morning after Dumbledore's death, and although she had not immediately recognized the initials as belonging to some obscure wizard about whom she had been reading, she had since been rushing off to the library a little more often than was strictly necessary for somebody who had no homework to do.

“No,” she said sadly, “I’ve been trying, Harry, but I haven’t found anything. ... There are a couple of reasonably well-known wizards with those initials — Rosalind Antigone Bungs ... Rupert ‘Axebanger’ Brookstanton ... but they don’t seem to fit at all. Judging by that note, the person who stole the Horcrux knew Voldemort, and I can’t find a shred of evidence

「あの本が、一度はアイリーン プリンスの本だったっていう私の考えが、正しかったっていうだけ。あのね……アイリーンはスネイプの母親だったの！」

「あんまり美人じゃないと思ってたよ」ロンが言ったが、ハーマイオニーは無視した。

「ほかの古い『予言者新聞』を調べていたら、アイリーン プリンスがトピラス スネイプっていう人と結婚したという、小さなお知らせが載っていたの。

それからしばらくして、またお知らせ広告があって、アイリーンが出産したってー」

「ー殺人者をだろ」ハリーが吐き捨てるように言った。

「ええ……そうね」ハーマイオニーが言った。

「だから……私がある意味では正しかったわけ。スネイプは『半分プリンス』であることをほこ誇りにしていたに違いないわ。わかる？『予言者新聞』によれば、トピラス スネイプはマグルだったわ」

「ああ、それでぴったり当てはまる」ハリーが言った。

「スネイプは、ルシウス マルフォイとか、ああいう連中に認められようとして、純血の血筋だけを誇張したんだろう……ヴォルデモートと同じだ。純血の母親、マグルの父親……純血の血統が半分しかないのを恥じて、『闇の魔術』を使って自分を恐れさせようとしたり、自分で仰々しい新しい名前をつけたりーヴォルデモート『卿』ー半純血の『プリンス』ーダンブルドアはどうしてそれに気づかなかったんだろうー？」

ハリーは言葉を途切らせ、窓の外に目をやった。

ダンブルドアがスネイプに対して、許しがたいほどの信頼を揮っていたということが、どうしても頭から振り払えない……しかし、ハリー自身が同じような思い込みをしていたことを、ハーマイオニーがいま、期せずして思い出させてくれた……走り書きの呪文がだんだん悪意のこもったものになってきていたのに、ハリーは、あんなに自分を助けてくれた、あれほど賢い男の子が悪人のはずはないと、頑なにそう考えていた。

that Bungs or Axebanger ever had anything to do with him. ... No, actually, it's about ... well, Snape."

She looked nervous even saying the name again.

"What about him?" asked Harry heavily, slumping back in his chair.

"Well, it's just that I was sort of right about the Half-Blood Prince business," she said tentatively.

"D'you have to rub it in, Hermione? How d'you think I feel about that now?"

"No — no — Harry, I didn't mean that!" she said hastily, looking around to check that they were not being overheard. "It's just that I was right about Eileen Prince once owning the book. You see ... she was Snape's mother!"

"I thought she wasn't much of a looker," said Ron. Hermione ignored him.

"I was going through the rest of the old *Prophets* and there was a tiny announcement about Eileen Prince marrying a man called Tobias Snape, and then later an announcement saying that she'd given birth to a —"

"— murderer," spat Harry.

"Well ... yes," said Hermione. "So ... I was sort of right. Snape must have been proud of being 'half a Prince,' you see? Tobias Snape was a Muggle from what it said in the *Prophet*."

"Yeah, that fits," said Harry. "He'd play up the pure-blood side so he could get in with Lucius Malfoy and the rest of them. ... He's just like Voldemort. Pure-blood mother,

自分を助けてくれたり……いまになってみれば、それは耐え難い思いだった。

「あの本を使っていたのに、スネイプがどうして君を突き出さなかったのか、わかんないなあ」ロンが言った。

「君がどこからいろいろ引っ張り出してくるのか、わかってたはずなのに」

「あいつはわかってたさ」ハリーは苦い思いで言った。

「僕がセクタムセンブラを使ったとき、あいつにはわかっていたんだ。『開心術』を使う必要なんかなかった……それより前から知っていたかもしれない。スラグホーンが、魔法薬学で僕がどんなに優秀かを吹聴していたから……自分の使った古い教科書を、棚の奥に置きっぱなしになんか、しておくべきじゃなかったんだ。そうだろう？」

「だけど、どうして君を突き出さなかったんだろう？」

「あの本との関係を、知られたくなかったんじゃないかしら」ハーマイオニーが言った。

「ダンブルドアがそれを知ったら、不快に思われたでしょうから。それに、スネイプが自分の物じゃないってしらを切っても、スラグホーンはすぐに筆跡を見破ったでしょうね。とにかく、あの本は、スネイプの昔の教室に置き去りになっていたものだし、ダンブルドアは、スネイプの母親が『プリンス』という名前だったことを知っていたはずよ」

「あの本を、ダンブルドアに見せるべきだった」ハリーが言った。

「ヴォルデモートは、学生のと看でさえ邪悪だったと、ダンブルドアがずっと僕に教えてくれているのに。そして僕は、スネイプも同じだったという証拠を手になっていたのに——」

「『邪悪』という言葉は強すぎるわ」ハーマイオニーが静かに言った。

「あの本が危険だって、さんざん言ったのは君だぜ！」

「私が言いたいのはね、ハリー、あなたが自分を責めすぎているということなの。『プリンス』がひねくれたユーモアのセンスの持ち主だとは思ったけど、殺人者になりうるなんて、まったく思わなかったわ……」

Muggle father ... ashamed of his parentage, trying to make himself feared using the Dark Arts, gave himself an impressive new name — *Lord Voldemort* — the Half-Blood *Prince* — how could Dumbledore have missed — ?”

He broke off, looking out the window. He could not stop himself dwelling upon Dumbledore’s inexcusable trust in Snape ... but as Hermione had just inadvertently reminded him, he, Harry, had been taken in just the same. ... In spite of the increasing nastiness of those scribbled spells, he had refused to believe ill of the boy who had been so clever, who had helped him so much. ...

Helped him ... it was an almost unendurable thought now.

“I still don’t get why he didn’t turn you in for using that book,” said Ron. “He must’ve known where you were getting it all from.”

“He knew,” said Harry bitterly. “He knew when I used Sectumsempra. He didn’t really need Legilimency. ... He might even have known before then, with Slughorn talking about how brilliant I was at Potions. ... Shouldn’t have left his old book in the bottom of that cupboard, should he?”

“But why didn’t he turn you in?”

“I don’t think he wanted to associate himself with that book,” said Hermione. “I don’t think Dumbledore would have liked it very much if he’d known. And even if Snape pretended it hadn’t been his, Slughorn would have recognized his writing at once. Anyway, the book was left in Snape’s old classroom, and I’ll bet Dumbledore knew his mother was

「誰も想像できなかったよ。スネイプが、ほら……あんなことをさ」ロンが言った。それぞれの思いに沈みながら、三人とも黙り込んだ。

しかしハリーは、二人とも自分と同じことを考えているのを知っていた。

明日の朝、ダンブルドアの亡骸が葬られるのだということを。

ハリーは、葬儀というものに参列したことがなかった。

シリウスが死んだときは、埋葬する亡骸がなかった。

何が行われるのか予想できず、ハリーは何を目にするのか、どういう気持ちになるのかが、少し心配だった。

葬儀が終われば、ダンブルドアの死が自分にとって、もっと現実的なものになるのだろうか。

ときどき、その恐ろしい事実が自分を押しつぶしそうになるときはあった。

しかし、ハリーの心には、何も感じられない空白の時間が広がっていて、城の中で誰もそれ以外の話はしていないにもかかわらず、その空白の時間の中では、ダンブルドアがいなくなったことがいまだに信じられなかった。

たしかに、シリウスのときとは違い、何か抜け穴はないか、なんとかダンブルドアが戻ってくる道はないかと、必死で探したりはしなかった……ハリーは、ポケットの中の偽の分霊箱の、冷たい鎖をまさぐった。

お守りとしてではなく、それがどれほどの代償を払ったものなのか、これから何をなすべきなのかを思い出させてくれるものとして、ハリーはどこに行くにもこれを持ち歩いていた。

次の日、ハリーは荷造りのため早く起きた。ホグワーツ特急は、葬儀の一時間後に出発することになっていた。

一階に下りていくと、大広間は沈痛な雰囲気包まれていた。

全員が式服を着て、誰もが食欲を失っているようだった。

マクゴナガル先生は、教職員テーブルの中央にある王座のような椅子を、空席のままにしていた。

called ‘Prince.’ ”

“I should’ve shown the book to Dumbledore,” said Harry. “All that time he was showing me how Voldemort was evil even when he was at school, and I had proof Snape was too —”

“ ‘Evil’ is a strong word,” said Hermione quietly.

“You were the one who kept telling me the book was dangerous!”

“I’m trying to say, Harry, that you’re putting too much blame on yourself. I thought the Prince seemed to have a nasty sense of humor, but I would never have guessed he was a potential killer. …”

“None of us could’ve guessed Snape would … you know,” said Ron.

Silence fell between them, each of them lost in their own thoughts, but Harry was sure that they, like him, were thinking about the following morning, when Dumbledore’s body would be laid to rest. He had never attended a funeral before; there had been no body to bury when Sirius had died. He did not know what to expect and was a little worried about what he might see, about how he would feel. He wondered whether Dumbledore’s death would be more real to him once it was over. Though he had moments when the horrible fact of it threatened to overwhelm him, there were blank stretches of numbness where, despite the fact that nobody was talking about anything else in the whole castle, he still found it difficult to believe that Dumbledore had really gone. Admittedly he had not, as he had with Sirius, looked desperately for some kind of loophole,

ハグリッドの椅子も空席だった。
たぶん、朝食など見る気もしないのだろう
と、ハリーは思った。
しかしスネイプの席には、ルーファス スク
リムジョールが無造作に座っていた。
その黄ばんだ眼が大広間を見渡したとき、ハ
リーは視線を合わせないようにした。
スクリムジョールが自分を探している気がし
て、落ち着かなかった。
スクリムジョールの随行者の中に、赤毛で角
縁メガネのパーシー ウィーズリーがいるの
を、ハリーは見つけた。
ロンは、パーシーに気づいた様子を見せなかつ
たが、やたらとに憎しみを込めて鯨の燻製
を突き刺した。
スリザリンのテーブルでは、クラブとゴイル
がひそひそ話をしていた。
図体の大きな二人なのに、その間で威張り散
らしている背の高い蒼白い顔のマルフォイが
いないと、奇妙にしょんぼりしているように
見えた。
ハリーは、マルフォイのことをあまり考えて
いなかった。
もっぱら、スネイプだけを憎悪していた。
しかし、塔の屋上でマルフォイの声が恐怖に
震えたことも、ほかの死喰い人がやってくる
前に杖を下ろしたことも忘れてはいなかつ
た。
ハリーには、マルフォイが、ダンブルドアを
殺しただろうとは思えなかった。
マルフォイが、闇の魔術の虜になったことは
嫌悪していたが、いまではそれだけでなく、
ほんのわずかに哀れみが混じっていた。
マルフォイは、いまどこにいるのだろう。
ヴォルデモートは、マルフォイも両親をも殺
すと脅して、マルフォイに何をさせようとし
ているのだろうか？ 考えに耽っていたハリー
は、ジニーに脇腹を小突かれて、我に返つ
た。
マクゴナガル先生が立ち上がっていた。
大広間の悲しみに沈んだざわめきが、たちま
ちやんだ。
「まもなく時間です」マクゴナガル先生が言
った。
「それぞれの寮監に従って、校庭に出てくだ

some way that Dumbledore would come
back. ... He felt in his pocket for the cold chain
of the fake Horcrux, which he now carried with
him everywhere, not as a talisman, but as a re-
minder of what it had cost and what remained
still to do.

Harry rose early to pack the next day; the
Hogwarts Express would be leaving an hour
after the funeral. Downstairs, he found the
mood in the Great Hall subdued. Everybody
was wearing their dress robes and no one
seemed very hungry. Professor McGonagall
had left the thronelike chair in the middle of
the staff table empty. Hagrid's chair was
deserted too; Harry thought that perhaps he had
not been able to face breakfast, but Snape's
place had been unceremoniously filled by
Rufus Scrimgeour. Harry avoided his
yellowish eyes as they scanned the Hall; Harry
had the uncomfortable feeling that Scrimgeour
was looking for him. Among Scrimgeour's en-
tourage Harry spotted the red hair and horn-
rimmed glasses of Percy Weasley. Ron gave
no sign that he was aware of Percy, apart from
stabbing pieces of kipper with unwonted
venom.

Over at the Slytherin table Crabbe and
Goyle were muttering together. Hulking boys
though they were, they looked oddly lonely
without the tall, pale figure of Malfoy between
them, bossing them around. Harry had not
spared Malfoy much thought. His animosity
was all for Snape, but he had not forgotten the
fear in Malfoy's voice on that tower top, nor
the fact that he had lowered his wand before
the other Death Eaters arrived. Harry did not
believe that Malfoy would have killed
Dumbledore. He despised Malfoy still for his

さい。グリフィンドール生は、私についておいでなさい」

全員がほとんど無言で、各寮のベンチから立ち上がり、ゾロゾロと行列して歩き出した。スリザリンの列の先頭に立つスラグホーンを、ハリーがちらりと見ると、銀色の刺繍を施した、豪華なエメラルド色の長いローブをまとっていた。

ハッフルパフの寮監であるスプラウト先生がこんなにござっぱりしているのを、ハリーは見たことがなかった。

帽子には唯の一つも継ぎがない。

玄関ホールに出ると、マダム ピンスが、膝まで届く分厚い黒ベールをかぶって、フィルチの脇に立っていた。

フィルチのほうは、樟脳の匂いがプンプンする、古くさい黒の背広にネクタイ姿だった。正面扉から石段に踏み出したとき、ハリーは全員が湖に向かってるのがわかった。

太陽が、暖かくハリーの顔を撫でた。

マクゴナガル先生のあとから黙々と歩き、何百という椅子が何列も何列も並んでいる場所に着いた。

中央に一本の通路が走り、正面に大理石の台が設えられて、椅子は全部その台に向かって置かれている。

あくまでも美しい夏の日だった。

椅子の半分ほどがすでに埋まり、質素な身なりから格式ある服装まで、老若男女、ありとあらゆる種類の追悼者が着席していた。

ほとんどが見知らぬ参列者たちだったが、わずかに「不死鳥の騎士団」のメンバーを含む、何人かは見分けられた。

キングズリー シャツクルボルト、マッドアイ ムーディ、不思議なことに髪が再びショッキングピンクになったトンクスは、リーマス ルーピンと手をつないでいる。

ウィーズリー夫妻、フラワーに支えられたビル、その後ろには、黒いドラゴン革の上着を着たフレッドとジョージがいた。

さらに、一人で二人半分の椅子を占領しているマダム マクシーム、「漏れ鍋」の店主のトム、ハリーの近所に住んでいるスクイブのアラベラ フィッグ、「妖女シスターズ」グ

infatuation with the Dark Arts, but now the tiniest drop of pity mingled with his dislike. Where, Harry wondered, was Malfoy now, and what was Voldemort making him do under threat of killing him and his parents?

Harry's thoughts were interrupted by a nudge in the ribs from Ginny. Professor McGonagall had risen to her feet, and the mournful hum in the Hall died away at once.

"It is nearly time," she said. "Please follow your Heads of Houses out into the grounds. Gryffindors, after me."

They filed out from behind their benches in near silence. Harry glimpsed Slughorn at the head of the Slytherin column, wearing magnificent, long, emerald green robes embroidered with silver. He had never seen Professor Sprout, Head of the Hufflepuffs, looking so clean; there was not a single patch on her hat, and when they reached the entrance hall, they found Madam Pince standing beside Filch, she in a thick black veil that fell to her knees, he in an ancient black suit and tie reeking of mothballs.

They were heading, as Harry saw when he stepped out onto the stone steps from the front doors, toward the lake. The warmth of the sun caressed his face as they followed Professor McGonagall in silence to the place where hundreds of chairs had been set out in rows. An aisle ran down the center of them: There was a marble table standing at the front, all chairs facing it. It was the most beautiful summer's day.

An extraordinary assortment of people had already settled into half of the chairs; shabby

ループの毛深いベース奏者、「夜の騎士バス」の運転手のアーニー プラング、「ダイアゴン横丁」で洋装店を営むマダム マルキン。

ハリーが、顔だけは知っている人たちも参列している。

ホッグズ ヘッドのバーテン、ホグワーツ特急で車内販売のカートを押している魔女などだ。

城のゴーストたちも、眩しい太陽光の中ではほとんど見えなかったが、動いたときだけ、煌めく空気の中で、儚げに光るつかみ所のない姿が見えた。

ハリー、ロン、ハーマイオニー、ジニーの四人は、列のいちばん奥で、湖の際の席に並んで座った。

参列者が互いに囁き合う声が、芝生を渡るそよ風のような音を立てていたが、鳥の声のほうはずっとはっきりと聞こえた。

参列者はどんどん増え続けた。

ネビルがルーナに支えられて席に着くのを見て、ハリーは二人に対する熱い思いが一度に込み上げてきた。

ダンブルドアが亡くなったあの夜、D Aのメンバーの中で、ハーマイオニーの呼びかけに応えたのは、この二人だけだった。

ハリーは、それがなぜなのかを知っていた。D Aがなくなったことを、いちばん寂しく思っていたのがこの二人だ……たぶん、再開されることを願って、しょっちゅうコインを見ていたのだろう……。

コーネリウス ファッジが、惨めな表情で四人のそばを通り過ぎ、いつものようにライムグリーンの山高帽をくるくる回しながら、列の前方に歩いていった。

ハリーは、リーク スキーターにも気づいたが、鉤爪をまっ赤に塗った手に、メモ帳をがっちりつかんでいるのには向かって腹が立った。

さらに、ドローレス アンブリッジを見つけて、腸が煮えくり返る思いがした。

ガマガエル顔に見え透いた悲しみを浮かべて、黒いピロードのリボンを灰色の髪のカールのてっぺんに結んでいる。

ケンタウルスのフィレンツェが、衛兵のよう

and smart, old and young. Most Harry did not recognize, but a few he did, including members of the Order of the Phoenix: Kingsley Shacklebolt; Mad-Eye Moody; Tonks, her hair miraculously returned to vividest pink; Remus Lupin, with whom she seemed to be holding hands; Mr. and Mrs. Weasley; Bill supported by Fleur and followed by Fred and George, who were wearing jackets of black dragon skin. Then there was Madame Maxime, who took up two and a half chairs on her own; Tom, the landlord of the Leaky Cauldron in London; Arabella Figg, Harry's Squib neighbor; the hairy bass player from the Wizarding group the Weird Sisters; Ernie Prang, driver of the Knight Bus; Madam Malkin, of the robe shop in Diagon Alley; and some people whom Harry merely knew by sight, such as the barman of the Hog's Head and the witch who pushed the trolley on the Hogwarts Express. The castle ghosts were there too, barely visible in the bright sunlight, discernible only when they moved, shimmering insubstantially on the gleaming air.

Harry, Ron, Hermione, and Ginny filed into seats at the end of a row beside the lake. People were whispering to each other; it sounded like a breeze in the grass, but the birdsong was louder by far. The crowd continued to swell; with a great rush of affection for both of them, Harry saw Neville being helped into a seat by Luna. Neville and Luna alone of the D.A. had responded to Hermione's summons the night that Dumbledore had died, and Harry knew why: They were the ones who had missed the D.A. most ... probably the ones who had checked their coins regularly in the hope that there would be

に湖の辺に立っている姿を目にしたアンブリッジは、ギクリとして、そこからずっと離れた席までおたおたと走っていった。

最後に先生方が着席した。

最前列のスクリムジョールが、マクゴナガル先生の隣で厳粛な、威厳たっぷりの顔をしているのが見えた。

ハリーは、スクリムジョールにしても、そのほかのお偉方にしても、ダンブルドアが死んだことを本当に悲しんでいるのだろうかかと疑った。そのとき、音楽が聞こえてきた。

不思議な、この世のものとも思えない音楽だ。

ハリーは魔法省に対する嫌悪感も忘れて、どこから聞こえてくるのかとあたりを見回した。

ハリーだけではなく、ドキリと驚いたような大勢の顔が、音の源を探してあちこちを見ていた。

「あそこだわ」ジニーがハリーの耳に囁いた。

陽の光を受けて緑色に輝く、澄んだ湖面の数センチ下に、ハリーはその姿を見た。

とつぜん「亡者」を思い出してゾッとしたが、それは「水中人」たちが合唱する姿だった。

青白い顔を水中に揺らめかせ、紫がかった髪をその周りにゆらゆらと広げて、ハリーの理解できない不思議な言葉で歌っていた。首筋がザワザワするような音楽だったが、不愉快な音ではなかった。

別れと悲嘆の気持ちを雄弁に伝える歌だった。

歌う水中人の荒々しい顔を見下ろしながら、ハリーは、少なくとも水中人はダンブルドアの死を悲しんでいる、という気がした。

そのとき、ジニーがまたハリーを小突き、振り返らせた。

椅子の間に設けられた一筋の通路を、ハグリッドがゆっくりと歩いてくるところだった。顔中を涙で光らせ、ハグリッドは声を出さずに泣いていた。

その両腕に抱かれ、金色の星をちりばめた紫のピロードに包まれているのが、それとわかるダンブルドアの亡骸だ。

another meeting.

Cornelius Fudge walked past toward the front rows, his expression miserable, twirling his green bowler hat as usual; Harry next recognized Rita Skeeter, who, he was infuriated to see, had a notebook clutched in her red-taloned hand, and then, with a worse jolt of fury, Dolores Umbridge, an unconvincing expression of grief upon her toadlike face, a black velvet bow set atop her iron-colored curls. At the sight of the centaur Firenze, who was standing like a sentinel near the water's edge, she gave a start and scurried hastily into a seat a good distance away.

The staff was seated at last. Harry could see Scrimgeour looking grave and dignified in the front row with Professor McGonagall. He wondered whether Scrimgeour or any of these important people were really sorry that Dumbledore was dead. But then he heard music, strange, otherworldly music, and he forgot his dislike of the Ministry in looking around for the source of it. He was not the only one: Many heads were turning, searching, a little alarmed.

"In there," whispered Ginny in Harry's ear.

And he saw them in the clear green sunlit water, inches below the surface, reminding him horribly of the Inferi: a chorus of merpeople singing in a strange language he did not understand, their pallid faces rippling, their purplish hair flowing all around them. The music made the hair on Harry's neck stand up, and yet it was not unpleasant. It spoke very clearly of loss and of despair. As he looked down into the wild faces of the singers, he had the feeling that they, at least, were sorry for

喉元に熱いものが込み上げてきた。
不思議な音楽に加えて、ダンブルドアの亡骸がこれほど身近にあるという思いが、一瞬、その日の暖かさをすべて奪い去ってしまったような気がした。
ロンは衝撃を受けたように蒼白な顔だった。ジニーとハーマイオニーの膝に、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれ落ちた。
正面で何が行われているのか、四人にはよく見えなかったが、ハグリッドが亡骸を台の上にそっと載せたようだった。
それからハグリッドは、トランペットを吹くような大きな音を立てて鼻をかみながら通路を引き返し、咎めるような目をハグリッドに向けた何人かの中に、ドローレス アンブリッジがいるのをハリーは見た……ダンブルドアならちっとも気にしなかったに違いないと、ハリーにはわかっていた。
ハグリッドがそばを通ったとき、ハリーは親しみを込めて合図を送ってみたが、ハグリッドの泣き腫らした眼では、自分の行き先が見えていることさえ不思議だった。
ハグリッドが向かっていく先の後列の席をちらりと見たハリーは、ハグリッドが何に導かれているのかわかった。
そこに、ちょっとしたテントほどの大きさの上着とズボンとを身に着けた、巨人のグロウプがいた。
醜い大岩のような頭を下げ、おとなしく、ほとんど普通の人間のように座っている。
ハグリッドが異父弟のグロウプの隣に座ると、グロウプはハグリッドの頭をボンボンと叩いたが、その強さにハグリッドの座った椅子の脚が地中にめり込んだ。
ハリーはほんの一瞬、愉快になり、笑い出したくなった。
しかしそのとき音楽がやみ、ハリーはまた正面に向き直った。
黒いロープの喪服を着た、髪の毛がふさふさした小さな魔法使いが立ち上がり、ダンブルドアの亡骸の前に進み出た。
何を言っているのか、ハリーには聞き取れなかった。
途切れ途切れの言葉が、何百という頭の上を通過して後列の席に流れてきた。

Dumbledore's passing. Then Ginny nudged him again and he looked around.

Hagrid was walking slowly up the aisle between the chairs. He was crying quite silently, his face gleaming with tears, and in his arms, wrapped in purple velvet spangled with golden stars, was what Harry knew to be Dumbledore's body. A sharp pain rose in Harry's throat at this sight: For a moment, the strange music and the knowledge that Dumbledore's body was so close seemed to take all warmth from the day. Ron looked white and shocked. Tears were falling thick and fast into both Ginny's and Hermione's laps.

They could not see clearly what was happening at the front. Hagrid seemed to have placed the body carefully upon the table. Now he retreated down the aisle, blowing his nose with loud trumpeting noises that drew scandalized looks from some, including, Harry saw, Dolores Umbridge ... but Harry knew that Dumbledore would not have cared. He tried to make a friendly gesture to Hagrid as he passed, but Hagrid's eyes were so swollen it was a wonder he could see where he was going. Harry glanced at the back row to which Hagrid was heading and realized what was guiding him, for there, dressed in a jacket and trousers each the size of a small marquee, was the giant Grawp, his great ugly boulderlike head bowed, docile, almost human. Hagrid sat down next to his half-brother, and Grawp patted Hagrid hard on the head, so that his chair legs sank into the ground. Harry had a wonderful momentary urge to laugh. But then the music stopped, and he turned to face the

「高貴な魂」……「知的な貢献」……「偉大な精神」……あまり意味のない言葉だった。ハリーの知っているダンブルドアとは、ほとんど無縁の言葉だった。ダンブルドアが一言一言をどう考えていたかを、ハリーはとつぜん突然思い出した。「そーれ、わっしょい、こらしょい、どっこらしょい」

またしても込み上げてくる笑いを、ハリーはこらえなければならなかった……こんなときだというのは、僕はいったいどうしたんだろう？

ハリーの左のほうで軽い水音がして、水中人が水面に姿を現し、聞き入っているのが見えた。

二年前、ダンブルドアが水辺に屈み込み、マーミッシュ語で水中人の女長と話をしていたことを、ハリーは思い出した。

いまハリーが座っている場所の、すぐ近くだった。

ダンブルドアは、どこでマーミッシュ語を習ったのだろう。

ついにダンブルドアに聞かずじまいになってしまったことが、あまりにも多い。

ハリーが話さずじまいになってしまったことが、あまりにも多い……。

そのとたん、まったく突然に、恐ろしい真実が、これまでになく完璧に、否定しようもなハリーを打ちのめした。

ダンブルドアは死んだ。逝ってしまった……冷たいロケットを、ハリーは痛いほど強く握りしめた。

それでも熱い涙がこぼれ落ちるのを止めることはできなかった。

ハリーは、ハーマイオニーやほかのみんなから顔を背けて湖を見つめ、「禁じられた森」に目をやった。喪服の小柄な魔法使いが、単調な言葉を繰り返している……木々の間に何かが動いた。ケンタウルスたちもまた、最後の別れを惜しみに出てきたのだ。ケンタウルスたちが人目に触れるところには姿を現さず、弓を脇に抱え、半ば森影に隠れてじっと立ち尽くしたまま参列者を見つめているのが見えた。

最初に「禁じられた森」に入り込んだときの

front again.

A little tufty-haired man in plain black robes had got to his feet and stood now in front of Dumbledore's body. Harry could not hear what he was saying. Odd words floated back to them over the hundreds of heads. "Nobility of spirit" ... "intellectual contribution" ... "greatness of heart" ... It did not mean very much. It had little to do with Dumbledore as Harry had known him. He suddenly remembered Dumbledore's idea of a few words, "nitwit," "oddment," "blubber," and "tweak," and again had to suppress a grin. ... What was the matter with him?

There was a soft splashing noise to his left and he saw that the merpeople had broken the surface to listen too. He remembered Dumbledore crouching at the water's edge two years ago, very close to where Harry now sat, and conversing in Mermish with the Merchieftainess. Harry wondered where Dumbledore had learned Mermish. There was so much he had never asked him, so much he should have said. ...

And then, without warning, it swept over him, the dreadful truth, more completely and undeniably than it had until now. Dumbledore was dead, gone. ... He clutched the cold locket in his hand so tightly that it hurt, but he could not prevent hot tears spilling from his eyes: He looked away from Ginny and the others and stared out over the lake, toward the forest, as the little man in black droned on. ... There was movement among the trees. The centaurs had come to pay their respects too. They did not move into the open but Harry saw them standing quite still, half hidden in shadow,

悪夢のような経験を、ハリーは思い出した。あの当時の仮の姿のヴォルデモートと初めて遭遇したこと、ヴォルデモートとの対決のこと、そして、そのあと間もなく、勝ち目のない戦いについて、ダンブルドアと話し合ったことを思い出した。

ダンブルドアは言った。

何度も何度も戦って、戦い続けることが大切だと。

そうすることで初めて、たとえ完全に根絶できなくとも、悪を食い止めることが可能なのだと……。

熱い太陽の下に座りながら、ハリーははっきりと気づいた。

ハリーを愛した人々が、一人、また一人とハリーの前で敵に立ちはだかり、あくまでもハリーを護ろうとしたのだ。

父さん、母さん、名付け親、そしてついにダンブルドアまでも。

しかし、いまやそれは終わった。

自分とヴォルデモートの間に、もう他の誰をも立たせるわけにはいかない。

両親の腕に護られ、自分を傷つけるものは何もないなどという幻想を、ハリーは未来永劫捨て去らなければならない。

一歳のときにすでに捨てるべきだった。

もはやハリーはこの悪夢から醒めることはないし、本当は安全なのだ、すべては思い込みにすぎないのだと闇の中で囁く、慰めの声もない。

最後の、そしてもっとも偉大な庇護者が死んでしまった。

そしてハリーは、これまでより、もっとひとりばっちだった。

喪服の小柄な魔法使いが、やっと話すのをやめて席に戻った。

ほかの誰かが立ち上がるのを、ハリーは待った。

おそらく魔法大臣の弔辞などが続くのだろうと思った。

しかし、誰も動かなかった。

やがて何人かが悲鳴を上げた。

ダンブルドアの亡骸とそれを載せた台の周りに、眩い白い炎が燃え上がった。

炎はだんだん高く上がり、亡骸が朧にしか見

watching the wizards, their bows hanging at their sides. And Harry remembered his first nightmarish trip into the forest, the first time he had ever encountered the thing that was then Voldemort, and how he had faced him, and how he and Dumbledore had discussed fighting a losing battle not long thereafter. It was important, Dumbledore said, to fight, and fight again, and keep fighting, for only then could evil be kept at bay, though never quite eradicated. ...

And Harry saw very clearly as he sat there under the hot sun how people who cared about him had stood in front of him one by one, his mother, his father, his godfather, and finally Dumbledore, all determined to protect him; but now that was over. He could not let anybody else stand between him and Voldemort; he must abandon forever the illusion he ought to have lost at the age of one, that the shelter of a parent's arms meant that nothing could hurt him. There was no waking from his nightmare, no comforting whisper in the dark that he was safe really, that it was all in his imagination; the last and greatest of his protectors had died, and he was more alone than he had ever been before.

The little man in black had stopped speaking at last and resumed his seat. Harry waited for somebody else to get to their feet; he expected speeches, probably from the Minister, but nobody moved.

Then several people screamed. Bright, white flames had erupted around Dumbledore's body and the table upon which it lay: Higher and higher they rose, obscuring the body. White smoke spiraled into the air and made strange

えなくなった。
白い煙が渦を巻いて立ち昇り、不思議な形を描いた。
ほんの一瞬、青空に楽しげに舞う不死鳥の姿を見たような気がして、ハリーは心臓が止まる思いがした。
しかし次の瞬間、炎は消え、そのあとには、ダンブルドアの亡骸と、亡骸を載せた台とを葬った、白い大理石の墓が残されていた。
天から雨のように矢が降り注ぎ、再び衝撃の悲鳴が上がった。
しかし矢は参列者から遥かに離れたところに落ちた。
それがケンタウルスの死者への表敬の礼なのだと、ハリーにはわかった。
ケンタウルスは参列者に尻尾を向け、涼しい木々の中へと戻っていった。
同じく水中人も、緑色の湖の中へとゆっくり沈んでいき、姿が見えなくなった。
ハリーは、ジニー、ロン、ハーマイオニーを見た。
ロンは太陽が眩しいかのように顔をくしゃくしゃにしかめていた。
ハーマイオニーの顔は涙で光っていたが、ジニーはもう泣いてはいなかった。
ハリーの視線を、ジニーは燃えるような強い眼差しで受け止めた。
ハリーが出場しなかったクィディッチ優勝戦で勝ったあと、ハリーに抱きついたときにジニーが見せた、あの眼差しだった。
その瞬間ハリーは、二人が完全に理解し合ったことを知った。
ハリーがいま何をしようとしているかを告げても、ジニーは「気をつけて」とか「そんなことをしないで」とは言わず、ハリーの決意を受け入れるだろう。
なぜなら、ジニーがハリーに期待していたのは、それ以外の何物でもないからだ。
ダンブルドアが亡くなって以来ずっと、言わなければならないとわかっていたことをついに言おうと、ハリーは自分を奮い立たせた。
「ジニー、話があるんだ……」
ハリーはごく静かな声で言った。
周囲のざわめきがだんだん大きくなり、参列客が立ち上がりはじめていた。

shapes: Harry thought, for one heart-stopping moment, that he saw a phoenix fly joyfully into the blue, but next second the fire had vanished. In its place was a white marble tomb, encasing Dumbledore's body and the table on which he had rested.

There were a few more cries of shock as a shower of arrows soared through the air, but they fell far short of the crowd. It was, Harry knew, the centaurs' tribute: He saw them turn tail and disappear back into the cool trees. Likewise, the merpeople sank slowly back into the green water and were lost from view.

Harry looked at Ginny, Ron, and Hermione: Ron's face was screwed up as though the sunlight were blinding him. Hermione's face was glazed with tears, but Ginny was no longer crying. She met Harry's gaze with the same hard, blazing look that he had seen when she had hugged him after winning the Quidditch Cup in his absence, and he knew that at that moment they understood each other perfectly, and that when he told her what he was going to do now, she would not say, "Be careful," or "Don't do it," but accept his decision, because she would not have expected anything less of him. And so he steeled himself to say what he had known he must say ever since Dumbledore had died.

"Ginny, listen ..." he said very quietly, as the buzz of conversation grew louder around them and people began to get to their feet, "I can't be involved with you anymore. We've got to stop seeing each other. We can't be together."

She said, with an oddly twisted smile, "It's

「君とはもう、つき合うことができない。もう会わないようにしないとイケない。一緒にはいられないんだ」

「何かばかげた気高い理由のせいね。そうでしょう？」

ジニーは奇妙に歪んだ笑顔で言った。

「君と一緒にだったこの数週間は、まるで……まるで誰かほかの人の人生を生きていたような気がする」ハリーが言った。

「でも僕はもう……僕たちはもう……僕にはいま、ひとりでやらなければならないことがあるんだ」ジニーは泣かなかった。

ただハリーを見つめていた。

「ヴォルデモートは、敵の親しい人たちを利用する。すでに君を罠にしたことがある。しかもそのときは、僕の親友の妹というだけで。僕たちの関係がこのまま続けば、君がどんなに危険な目に遭うか、考えてみてくれ。あいつは嗅ぎつけるだろう。あいつにはわかってしまうだろう。あいつは君を使って僕を挫こうとするだろう」

「わたしが気にしないって言ったら？」ジニーが、激しい口調で言った。

「僕が気にする」ハリーが言った。

「これが君の葬儀だったら、僕がどんな思いをするか……それが僕のせいだったら……」ジニーは目を逸らし、湖を見た。

「わたし、あなたのことを完全に諦めたことはなかった」ジニーが言った。

「完全にはね。想い続けていたわ……ハーマイオニーが、わたしはわたしの人生を生きてみなさいって言ってくれたの。誰かほかの人とつき合って、あなたのそばにいたりするとき、もう少し気楽にしていたらどうかって。だって、あなたが同じ部屋にいただけで、わたしが口もきけなかったことを、憶えてるでしょう？ だからハーマイオニーは、わたしがもう少し、わたしらしくしていたら、あなたが少しは気づいてくれるかもしれないって、そう考えたの」

「賢い人だよ、ハーマイオニーは」ハリーは微笑もうと努力しながら言った。

「もっと早く君に申し込んでいればよかった。そうすれば長い間……何ヶ月も……もしかしたら何年も……」

for some stupid, noble reason, isn't it?"

"It's been like ... like something out of someone else's life, these last few weeks with you," said Harry. "But I can't ... we can't ... I've got things to do alone now."

She did not cry, she simply looked at him.

"Voldemort uses people his enemies are close to. He's already used you as bait once, and that was just because you're my best friend's sister. Think how much danger you'll be in if we keep this up. He'll know, he'll find out. He'll try and get to me through you."

"What if I don't care?" said Ginny fiercely.

"I care," said Harry. "How do you think I'd feel if this was your funeral ... and it was my fault. ..."

She looked away from him, over the lake.

"I never really gave up on you," she said. "Not really. I always hoped. ... Hermione told me to get on with life, maybe go out with some other people, relax a bit around you, because I never used to be able to talk if you were in the room, remember? And she thought you might take a bit more notice if I was a bit more — myself."

"Smart girl, that Hermione," said Harry, trying to smile. "I just wish I'd asked you sooner. We could've had ages ... months ... years maybe. ..."

"But you've been too busy saving the Wizarding world," said Ginny, half laughing. "Well ... I can't say I'm surprised. I knew this would happen in the end. I knew you wouldn't be happy unless you were hunting Voldemort."

「でもあなたは、魔法界を救うことで大忙しだった」ジニーは半分笑いながら言った。

「そうね……わたし、驚いたわけじゃないの。結局はこうなると、わたしにはわかっていた。あなたは、ヴォルデモートを追ってなければ満足できないだろうって、わたしにはわかっていた。たぶん、わたしはそんなあなたが大好きなのよ」

ハリーは、こうした言葉を聞くのが耐え難いほど辛かった。

このままジニーのそばに座っていたら、自分の決心が鈍らない自信はなかった。

ロンを見ると、高い鼻の先から涙を滴らせながら、自分の肩に顔を埋めてすすり泣くハーマイオニーを抱き、その髪を撫でていた。

ハリーは、惨めさを体中に滲ませて立ち上がり、ジニーとダンブルドアの墓に背を向けて、湖に沿って歩き出した。

黙って座っているより、動いているほうが耐えやすいような気がした。

同じように、すぐにでも分霊箱を追跡し、ヴォルデモートを殺すほうが、それを待っていることより耐えやすい……。

「ハリー！」

振り返ると、ルーファス スクリムジョールだった。

ステッキにすがって足を引きずりながら、岸辺の道を大急ぎでハリーに近づいてくるところだった。

「君と一言話がしたかった……少し一緒に歩いてもいいかね？」

「ええ」ハリーは気のない返事をして、また歩き出した。

「ハリー、今回のことは、恐ろしい悲劇だった」

スクリムジョールが静かに言った。

「知らせを受けて、私がどんなに愕然としたか、言葉には表せない。ダンブルドアは偉大な魔法使いだった。君も知っているように、私たちには意見の相違もあったが、しかし、私はどよく知る者はほかに——」

「何の用ですか？」ハリーはぶっきらぼうに開いた。

スクリムジョールはむっとした様子だったが、前のときと同じように、すぐに表情を取

Maybe that's why I like you so much.”

Harry could not bear to hear these things, nor did he think his resolution would hold if he remained sitting beside her. Ron, he saw, was now holding Hermione and stroking her hair while she sobbed into his shoulder, tears dripping from the end of his own long nose. With a miserable gesture, Harry got up, turned his back on Ginny and on Dumbledore's tomb, and walked away around the lake. Moving felt much more bearable than sitting still, just as setting out as soon as possible to track down the Horcruxes and kill Voldemort would feel better than waiting to do it. ...

“Harry!”

He turned. Rufus Scrimgeour was limping rapidly toward him around the bank, leaning on his walking stick.

“I've been hoping to have a word ... do you mind if I walk a little way with you?”

“No,” said Harry indifferently, and set off again.

“Harry, this was a dreadful tragedy,” said Scrimgeour quietly. “I cannot tell you how appalled I was to hear of it. Dumbledore was a very great wizard. We had our disagreements, as you know, but no one knows better than I —”

“What do you want?” asked Harry flatly.

Scrimgeour looked annoyed, but as before, hastily modified his expression to one of sorrowful understanding.

“You are, of course, devastated,” he said. “I know that you were very close to Dumbledore.

り繕い、悲しげな物わかりのよい顔になった。

「君は、当然だが、ひどいショックを受けている」スクリムジョールが言った。

「君がダンブルドアと非常に親しかったことは知っている。おそらく君は、ダンブルドアのいちばんのお気に入りだったろう。二人の間の絆は——」

「何の用ですか？」ハリーは、立ち止まって繰り返した。

スクリムジョールも立ち止まってステッキに寄り掛かり、こんどは抜け目のない表情でハリーをじっと見た。

「ダンブルドアが死んだ夜のことが、君と一緒に学校を抜け出したと言う者がいてね」

「誰が言ったのですか？」ハリーが言った。

「ダンブルドアが死んだ後、塔の屋上で何者かが、死喰い人の一人に『失神呪文』をかけた。それに、その場に箒が二本あった。ハリー、魔法省はその二つを足すことぐらいできる」

「それはよかった」ハリーが言った。

「でも、僕がダンブルドアとどこに行こうと、二人が何をしようと、僕にしか関わりのないことです。ダンブルドアはほかの誰にも知られたくなかった」

「それほどまでの忠誠心は、もちろん称賛すべきだ」

スクリムジョールは、イライラを抑えるのが難しくなっているようだった。

「しかし、ハリー、ダンブルドアはいなくなった。もういないのだ」

「ここに、誰一人としてダンブルドアに忠実な者がいなくなったとき、ダンブルドアは初めてこの学校から本当にいなくなるんです」ハリーは思わず微笑んでいた。

「君、君……ダンブルドアといえども、まさか蘇ることは——」

「できるなんて言ってません。あなたにはわからないでしょう。でも、僕には何もお話しすることはありません」

スクリムジョールは躊躇していたが、やがて、気遣いのこもった調子を装って言った。

「魔法省としては、いいかね、ハリー、君にあらゆる保護を提供できるのだよ。私の『闇

I think you may have been his favorite pupil ever. The bond between the two of you ——”

“What do you want?” Harry repeated, coming to a halt.

Scrimgeour stopped too, leaned on his stick, and stared at Harry, his expression shrewd now.

“The word is that you were with him when he left the school the night that he died.”

“Whose word?” said Harry.

“Somebody Stupefied a Death Eater on top of the tower after Dumbledore died. There were also two broomsticks up there. The Ministry can add two and two, Harry.”

“Glad to hear it,” said Harry. “Well, where I went with Dumbledore and what we did is my business. He didn’t want people to know.”

“Such loyalty is admirable, of course,” said Scrimgeour, who seemed to be restraining his irritation with difficulty, “but Dumbledore is gone, Harry. He’s gone.”

“He will only be gone from the school when none here are loyal to him,” said Harry, smiling in spite of himself.

“My dear boy ... even Dumbledore cannot return from the ——”

“I am not saying he can. You wouldn’t understand. But I’ve got nothing to tell you.”

Scrimgeour hesitated, then said, in what was evidently supposed to be a tone of delicacy, “The Ministry can offer you all sorts of protection, you know, Harry. I would be delighted to place a couple of my Aurors at

被い』を二人、喜んで君のために配備しよう——」ハリーは笑った。

「ヴォルデモートは、自分自身で僕を手にかけたいんだ。『闇被い』がいたって、それが変わるわけじゃない。ですから、お申し出はありがたいですが、お断りします」

「では」スクリムジョールは、いまや冷たい声になっていた。

「クリスマスに、私が君に要請したことは——」

「何の要請ですか？ ああ、そうか……あなたがどんなにすばらしい仕事をしているかを、僕が世の中に知らせる。そうすれば——」

「——みんなの気持が高揚する！」
スクリムジョールが噛みつくように言った。
ハリーはしばらく、スクリムジョールをじっと観察した。

「スタン シャンパイクを、もう解放しましたか？」

スクリムジョールの顔色が陰悪な紫色に変わり、嫌でもバーノン叔父さんを彷彿とさせた。

「なるほど。君は——」
「骨の髄までダンブルドアに忠実」ハリーが言った。

「そのとおりです」
スクリムジョールは、しばらくハリーを睨みつけていたが、やがて踵を返し、足を引きずりながら、それ以上一言も言わずに去っていった。

パーシーと魔法省の一団が、席に座ったまますすり泣いているハグリッドとグロウプを、不安げにちらちら見ながら、大臣を待っているのが見えた。

ロンとハーマイオニーが急いでハリーのほうにやってくる途中、スクリムジョールとすれ違った。

ハリーはみんなに背を向け、二人が追いつきやすいようにゆっくり歩き出した。
ブナの木の下で、二人が追いついた。
何事もなかった日々には、その木陰に座って三人で楽しく過ごしたものだった。

「スクリムジョールは、何が望みだったの？」

ハーマイオニーが小声で聞いた。

your service ——”

Harry laughed. “Voldemort wants to kill me himself, and Aurors won’t stop him. So thanks for the offer, but no thanks.”

“So,” said Scrimgeour, his voice cold now, “the request I made of you at Christmas ——”

“What request? Oh yeah ... the one where I tell the world what a great job you’re doing in exchange for ——”

“—— for raising everyone’s morale!” snapped Scrimgeour.

Harry considered him for a moment.

“Released Stan Shunpike yet?”

Scrimgeour turned a nasty purple color highly reminiscent of Uncle Vernon.

“I see you are ——”

“Dumbledore’s man through and through,” said Harry. “That’s right.”

Scrimgeour glared at him for another moment, then turned and limped away without another word. Harry could see Percy and the rest of the Ministry delegation waiting for him, casting nervous glances at the sobbing Hagrid and Grawp, who were still in their seats. Ron and Hermione were hurrying toward Harry, passing Scrimgeour going in the opposite direction. Harry turned and walked slowly on, waiting for them to catch up, which they finally did in the shade of a beech tree under which they had sat in happier times.

“What did Scrimgeour want?” Hermione whispered.

“Same as he wanted at Christmas,”

突然心が満たされるような気がした。

「クリスマスのときと同じことさ」ハリーは肩をすくめた。

「ダンブルドアの内部情報を教えて、魔法省のために新しいアイドルになれってさ」

ロンは、一瞬自分と戦っているようだったが、やがてハーマイオニーに向かって大声で言った。

「いいか、僕は戻って、パーシーをぶん殴る！」

「だめ」ハーマイオニーは、ロンの腕をつかんできっぱりと言った。

「僕の気持ちがすっきりする！」ハリーは笑った。

ハーマイオニーもちょっと微笑んだが、城を見上げながらその笑顔が曇った。

「もうここには戻ってこないなんて、耐えられないわ」ハーマイオニーがそっと言った。

「ホグワーツが閉鎖されるなんて、どうして？」

「そうならないかもしれない」ロンが言った。

「家にいるよりこのほうが危険だなんて言えないだろう？ どこだっていまは同じさ。僕はむしろ、ホグワーツのほうが安全だって言うな。この中のほうが、護衛している魔法使いがたくさんいる。ハリー、どう思う？」

「学校が再開されても、僕は戻らない」ハリーが言った。

ロンはボカンとしてハリーを見つめた。

ハーマイオニーが悲しそうに言った。

「そう言うと思ったわ。でも、それじゃあなたは、どうするつもりなの？」

やはりハーマイオニーには解っていたようだった。

今までもこれからもハーマイオニー以上に僕が解る人はいないだろう。

「僕はもう一度ダーズリーのところに帰る。それがダンブルドアの望みだったから」

ハリーが言った。

「でも、短い期間だけだ。それから僕は永久にあそこを出る」

「でも、学校に戻ってこないなら、どこに行くの？」

「ゴドリックの谷に、戻ってみようと思って

shrugged Harry. “Wanted me to give him inside information on Dumbledore and be the Ministry’s new poster boy.”

Ron seemed to struggle with himself for a moment, then he said loudly to Hermione, “Look, let me go back and hit Percy!”

“No,” she said firmly, grabbing his arm.

“It’ll make me feel better!”

Harry laughed. Even Hermione grinned a little, though her smile faded as she looked up at the castle.

“I can’t bear the idea that we might never come back,” she said softly. “How can Hogwarts close?”

“Maybe it won’t,” said Ron. “We’re not in any more danger here than we are at home, are we? Everywhere’s the same now. I’d even say Hogwarts is safer, there are more wizards inside to defend the place. What d’you reckon, Harry?”

“I’m not coming back even if it does reopen,” said Harry.

Ron gaped at him, but Hermione said sadly, “I knew you were going to say that. But then what will you do?”

“I’m going back to the Dursleys’ once more, because Dumbledore wanted me to,” said Harry. “But it’ll be a short visit, and then I’ll be gone for good.”

“But where will you go if you don’t come back to school?”

“I thought I might go back to Godric’s Hollow,” Harry muttered. He had had the idea

いる」ハリーが呟くように言った。
ダンブルドアが死んだ夜から、ハリーはずっとそのことを考えていた。

「僕にとって、あそこがすべての出発点だ。あそこに行く必要があるという気がするんだ。そうすれば、両親の墓に詣でることができる。そうしたいんだ」

「それからどうするんだ？」ロンが聞いた。
「それから、残りの分霊箱を探し出さなければならぬんだ」

ハリーは、向こう岸の湖に映っている、ダンブルドアの白い墓に眼を向けた。

「僕がそうすることを、ダンブルドアは望んでいた。だからダンブルドアは、僕に分霊箱のすべてを教えてくれたんだ。ダンブルドアが正しければ——僕はそうだと信じているけど——あと四個の分霊箱がどこかにある。探し出して破壊しなければならないんだ。それから七個目を追わなければならない。まだヴォルデモートの身体の中にある魂だ。そして、あいつを殺すのは僕なんだ。もしその途上でセブルス スネイプに出会ったら」ハリーは言葉を続けた。

「僕にとってはありがたいことで、あいつにとっては、ありがたくないことになる」
長い沈黙が続いた。

参列者はもうほとんどいなくなって、取り残された何人かが、ハグリッドに寄り添って抱きかかえている小山のようなグロウプから、できるだけ遠ざかっていた。

ハグリッドの吼えるような哀切の声はまだやまず、湖面に響き渡っていた。

「僕たち、行くよ、ハリー」ロンが言った。
「え？」

「君の叔父さんと叔母さんの家に」ロンが言った。

「それから君と一緒に行く。どこにでも行く」

「だめだ——」

ハリーが即座に言った。そんなことは期待していなかった。

この危険極まりない旅に、自分はひとりで出かけるのだということを、二人に理解してもらいたかったのだ。

「あなたは、前に一度こう言ったわ」

in his head ever since the night of Dumbledore's death. "For me, it started there, all of it. I've just got a feeling I need to go there. And I can visit my parents' graves, I'd like that."

"And then what?" said Ron.

"Then I've got to track down the rest of the Horcruxes, haven't I?" said Harry, his eyes upon Dumbledore's white tomb, reflected in the water on the other side of the lake. "That's what he wanted me to do, that's why he told me all about them. If Dumbledore was right — and I'm sure he was — there are still four of them out there. I've got to find them and destroy them, and then I've got to go after the seventh bit of Voldemort's soul, the bit that's still in his body, and I'm the one who's going to kill him. And if I meet Severus Snape along the way," he added, "so much the better for me, so much the worse for him."

There was a long silence. The crowd had almost dispersed now, the stragglers giving the monumental figure of Grawp a wide berth as he cuddled Hagrid, whose howls of grief were still echoing across the water.

"We'll be there, Harry," said Ron.

"What?"

"At your aunt and uncle's house," said Ron. "And then we'll go with you wherever you're going."

"No —" said Harry quickly; he had not counted on this, he had meant them to understand that he was undertaking this most dangerous journey alone.

"You said to us once before," said

ハーマイオニーが静かに言った。
「私たちがそうしたいなら、引き返す時間はあるって。その時間はもう十分にあったわ、違う？」
「何があろうと、僕たちは君と一緒にだ」ロンが言った。
「だけど、おい、何をするより前に、僕のパパとママのところに帰ってこないといけないぜ。ゴドリックの谷より前に」
「どうして？」
「ビルとフラーの結婚式だ。忘れたのか？」
ハリーは驚いてロンの顔を見た。
結婚式のようなあたりまえのことがまだ存在しているなんて、信じられなかった。
しかしすばらしいことだった。
「ああ、そりゃあ僕たち、見逃せないな」
しばらくしてハリーが言った。
ハリーは、我知らず偽の分霊箱を掘りしめていた。
いろいろなことがあるけれど、目の前に暗く曲折した道が伸びてはいるけれど、一カ月後か、一年後か、十年後か、やがてはヴォルデモートとの最後の対決の日が来ると、わかっているけれど、ロンやハーマイオニーと一緒に過ごせる、最後の平和な輝かしい一日がまだ残されていると思うと、ハリーは心が浮き立つのを感じた。

Hermione quietly, “that there was time to turn back if we wanted to. We’ve had time, haven’t we?”

“We’re with you whatever happens,” said Ron. “But mate, you’re going to have to come round my mum and dad’s house before we do anything else, even Godric’s Hollow.”

“Why?”

“Bill and Fleur’s wedding, remember?”

Harry looked at him, startled; the idea that anything as normal as a wedding could still exist seemed incredible and yet wonderful.

“Yeah, we shouldn’t miss that,” he said finally.

His hand closed automatically around the fake Horcrux, but in spite of everything, in spite of the dark and twisting path he saw stretching ahead for himself, in spite of the final meeting with Voldemort he knew must come, whether in a month, in a year, or in ten, he felt his heart lift at the thought that there was still one last golden day of peace left to enjoy with Ron and Hermione.